



## ご挨拶

---

水澤雪下ひとり雑誌

雪下

第二十九号

2022/12/02 発行

題字：高橋弘美

先月イベントに出たら、面白い発見がいろいろあった。イベントのあと一週間ほど東京で過ごしたが、そのときにもまた興味深い発見をした。それで故郷に戻ったら、今度は故郷に勝るものはないと思った。なんだかもうこの土地から離れることができそうにない。どんなに金を積まれても、別のところには住みたくない。そう思うためだけでも、ときにはよそへ出るというのもいいことであるに違いない。

今回は、文学フリマなるイベントに参加して、どんな収穫を得てなにを考えたのか、素直に書いてみることにする。べつに大したことを考えているわけではないのだが、このひとり雑誌という仕組みはそのままに、ひとり同人誌を定期的に刊行しようかと思ったりしている。これまで、文字だって結局はデータなのだから、データにしていればそれでいいのだと思っていたのだが、世の中はわたしが思う以上に現物優先の世界であって、デジタル社会などというものはまだ当分来そうにないことがわかった。いつものことだが、自分は少し行き過ぎ、偏りすぎたらしい。それが悪いこととは思わないけれども。

## 今号の内容

デジタルとこの世の重さ  
後記に代えて

### デジタルとこの世の重さ

ウェブサイトに【同人誌「雪下」】というメニューができた。毎月発行しているこのひとり雑誌も、先日刊行した作品集も、「雪下」なるひとり同人誌として扱い、定期的に同人雑誌として刊行しようという試みである。

これまで、自分の書いたものを本にするとは考えたこともなかった。現物の雑誌を刊行しようなどとは、正直一度も思ったことがなく、そんな欲求は一度も抱いたことがない。今回の本だって、イベントに出ることになったので記念に本にしたままだ。そんなことでもなければ、このPDFのように、テキストなどすべてデータで事足りる話だし、なぜ好き好んでわざわざお金をかけて冊子にし、在庫を抱えるようなことをしなければならぬ？ そんなことはただの無駄、単なる手間ではないか。

ところが、それはただわたしひとりの考えであって、世の中は少しもそうでないということに、イベントに出て気がついたのである。わたしの小説は本

になったとたん、これまでより少し多くの人の手に渡ることになった。どうしてそういうことになるのか、データと本となりが違うのか、などとわたしは思ったりするのだが、現実がそうなのだからしょうがない。

幸か不幸か、わたしはウェブサイトを作ったり、こうしてデジタルの雑誌を作ったり、電子書籍を作成したりするようなことが好きだ。データを扱うのがわたしは好きだ。現実の世界より、パソコンのなかに広がる世界のほうが好きだとさえ云えるかもしれない。そこではひとりで、好きなことを好きなようにできる。この世界では、わたしは現実の世界よりもずっと器用でいられる。手書きでなにか書くようなことは、わたしにはトロくてとてもやっつけられないし、消しゴムや鉛筆や紙などが机の上にあるだけでもややこしいのに、それを消して書き直したり、書いた順に整理したり番号をふったりするなど、正気の沙汰とは思えない。

データはどこへも行かないが、物理的な本は場所をとる。ものはすべて場所をとる。そしてものがひとつ増えたとたん、その保管、管理、清潔に保つ努力、などのうんざりするような雑務がわがものとなる。まるで体のようだ。自分の体を身ぎれいにおく、故障しないように手をかける、動けるように燃料を補給し、休息をとらせる。こういうことは、まったくうんざりするような労働である。わたしな

ど、こんなことはみんな面倒な、よけいな手間のよ  
うな気がするのだ。

その点、データというやつはかわいいものだ。やれほこりをかぶったの黄ばんだの、ぶつかつたの落ちたのと云って騒ぐ必要がないし、体をもたないの  
で、腐ったり壊れたりすることもない。おまけに加  
工したり変更したりするのがうんと楽だ。テキスト  
データを編集するのに消しゴムはいらないし、ソフ  
トひとつで冊子にもなればウェブページにもなる。  
わたしがどうしてPDFで毎月雑誌を作っている  
か、どうしてこれまで自分の本というものを一度も  
作ってこなかったか、もうおわかりだと思ふ。現物  
はトロくて、かつたらくて、面倒で、正直に云って  
つきあっちゃおれないからである。

ところで、こんなことを書いておきながら、わたしは現物の印刷された本が好きだ。本というものは目で読むのだと多くの人は思っているかもしれないが、それは間違いである。本というのは指で読むのだ。

一時期、聖書の指定された文書の指定された箇所を、だいたい指で開くことができた。旧約聖書のほうは途中から文書の並びがどうだったかあやふやになってくるので、そのへんはあまり自信がなかったのだが、新約聖書ならどの文書も、だいたいの指先の感覚でもって開くことができた。マルコ三章は聖

書のどのへんか、ロマ書十一章は厚みのどのへんか、なぜか指が覚えていて、なんとなくこのへんだろうと思って開くとだいたい合っていた。

紙の感触で覚えている本というのもある。好きな本や印象的な本だと、その本の紙がどんなものだったか、たいていわけなく思い出せる。本を読みながら、ページの端をずっと指で触っているのがわたしは好きだ。紙にも顔というものがあがり、肌合いというものがある。そうしたもののや表紙の色彩なんか、なんとなくその本の個性というものを生んでいるような気がする。新しい岩波文庫の紙が好きだが、古くなって茶色くなった岩波文庫の紙もまたたまらないものだ。それは古紙独特の匂いを放つようになり、ページについたいくつもの小さなシミが、ちょうど老人の肌のシミのように、その本のたどってきた歴史や生きてきた年数を思わせる。

わたしの一部はかつて岩波文庫だった。この体を構成している炭素だか窒素だかなんとかは、持ち主の死とともに燃やされた岩波文庫の一冊から来ている。それでわたしの体はむやみに岩波文庫を恋しがり、せめて昔懐かしい仲間にもまれていたいと願って、わたしにせっせと岩波文庫を買うように仕向けるのである。

もし文章が単に情報ならば、紙の本で読もうが電子書籍で読もうが違いは少しもないに違いない。そ

してそれはたしかにその通りなのだ。電子書籍は紙の本と比較して明らかに、圧倒的に合理的だ。端末に入れて一度に大量に持ち歩けるし、保管する場所もとらない。本屋に買いに行くという手間もいらないし、アマゾンからの発送のお知らせや到着を待つ必要もない。内容の検索も容易だし、わからない言葉が出てきたら、その箇所を選択するだけで勝手に辞書が立ち上がってくれる。机の上に字引を置いておくとか、電子辞書に目を移してそちらに文字を入力する手間さえいらぬのだ。

同じように、キャッシュレス決済でデビットカードより楽なものをわたしは知らないし、それに比べたら小銭などというものはいかにも小さくてじゃらじゃらしてばかげていて、ただ重たくて汚いだけである。

物質の持つこうしたどうしようもないトロさ、どうしようもないもたつき、どうしようもない不便さを、わたしはずっと呪いながら生きてきた。デジタル社会はたぶん、わたしのようにせっかちな、物質など滅び去るがいいと思っている人間のためのものだ。なにかのSF映画にあったみたいに、人間が脳みそだけになって、脳が理解できる信号だけで生きられるようになったらどれだけいいだろう。人間というものがそこまで抽象化されたとしたら、どんな興味深い世界が待っていることだろう。

人間が心から自由を望む生き物だとする。そうしたら、なによりも先に排除すべきは物質の束縛に違いない。自分の本質が物理的に拘束されたこの体の向こうにあるのに違いないのと同じで、事物の本質は物質という制限を超えたところにあるに違いない。量子力学の世界ではすべてが確率であるように、物質をずっとずっと突きつめていった先には、たぶんこんな重苦しく制約だらけで不便だけの体だのものだという連中が、ひっくり返って泡を吹いてしまふような、自由な世界があるに違いないのだ。

人はその心のように、どこへでも瞬時に移動でき、どんな景色も見ることができるのでなければならぬ。どんな人やものとも容易に心が通いあうのであればならぬ。われわれの魂がそうであるように。そしてデータとは、なんとわれわれの魂に似ていることだろう！

ある哲学者によれば、天使とは、意思疎通の障害がないものことだという。それは互いに言葉をもたず、言葉を発するための体をもたないために、相手のことを理解しようとする欲求さえ感じる必要がない。彼らはただ存在しているだけで、互いにすべてが明らかなのだ。相手のことも自分のことも、お互いによくわかっている。そもそも彼らに相手だの自分だのいう概念があるかどうかも疑わしい。



そして彼らは自由だ。霊的存在であるから、どこへでも行くことができ、すぐに戻ってくることもできる。トビアと一緒に旅をした天使ラファエルは、ひと晩のうちにイスラエルからエジプトまで行って、悪霊を退治して戻ってきた。そんなふうには、望むままにどこにでも現れ、お告げをしたり悪者をやっつけたたり、歌を歌ってみたり人と取っ組み合いの勝負をしてみたりと、天使とは、まことに自由で無邪気なものである。

羽をもつ彼らにわたしたちはあこがれてやまない。それはこの肉体というものに閉じこめられたわたしたち自身の魂の姿だ。それは物理法則の限界を超えて、飛ばたこうとする。天使のように。そして科学技術の進歩は、わたしたちをものにまつわる手間やわずらわしさから解放し、あなたたちはほんとうに天使なのだときさやく。天使のように、あるいは召使いや奴隷が大勢いてすべての雑用を代わりにやってくれる優雅な紳士淑女のように、あなたたちは存在と生活とにまつわるあらゆる労苦から解放された存在なのだ。

そしてわたしたちは勘違いをはじめ、病気になったり怪我をしたり体調不良に見舞われたりして驚く。人の機嫌を損ねたり危うくけんかに発展しそうになったり、不愉快な思いをしたり傷ついたりして驚く。どうして？ どうしてわたしが傷ついたり痛んだりするのだろうか。わたしは天使のようなのに。それで

この不幸な人は、自分が天使でないのは自分になにか不都合な点があるからだ、あるいは社会制度に欠陥があるからだ、思いこみはじめ。

天使は決して傷つかない。疲れもしないし、病気になつたりもしない。なによりも、自分と他人との関係で悩んだりなど決してしない。自分が天使のようでないのはなにか原因があるからに決まっている。その原因を突きとめて排除しなければ。あるいは、自分が実は天使なんかじゃないと気づかれないように、それを隠さなければ。世界は今日もお天気で、わたしは上機嫌でなんの問題もなく、友だちとは仲がよく、みんな輝いている。天使のように。

こんな人間は、本人がどう思っているかはともかく、たいへん不幸なのではあるまいか。この不幸な人は、自分が人間であり、そもそも有限で欠陥だらけの存在なのだということを、すっかり忘れてしまっている。あるいは最初から知らないのかもしれない。人間の頭はコンピュータのように正確ではないし、人間の考えることはたいして理屈や洗練とはほど遠いのに、それと真逆のことを常に自分に求めているとしたら、いったいこの人はどうなってしまうか。

人の限界はすなわち体の限界である。頭のよさもせいぜい脳が許すところまでだし、どんなに機械のように動こうとしても、体が悲鳴を上げたらもうおしまいだ。そして体はたいして悲鳴を上げる。人の

抱く際限のない理想や欲望に耐えきれずに。

そして体の限界が人間の限界だということを忘れてしまった人は、死というものをどう考えたらいいかわからなくなるに決まっている。そうしたら、人類がせっかくここまで文明的な社会を作り上げてきたのに、また動物時代に逆戻りするのと同じことだ。人間とは、死を受けとめられるものことだ。それにまつわるあらゆる出来事や感情や予感や不安を、胸にしまっておくことのできるものことだ。それがわたしたちのすべてを生んできた。すべてはそこから生じた。それを忘却したときには、わたしたちはすべてを失うことになるに違いない。

こんなことを書いておきながら、わたし自身、デジタル万能主義みたいところがあり、現物のいまいましきをつい排除しがちである。自分のことに関しては特にそうだ。自分に手をかけることほど腹立たしいことはないし、自分の書いたものが現物の本になるなど、感慨よりもおぞましきのほうが勝るのではないだろうか？ そんなことになったら、それはなにか動かしがたいものになり、固定されたものになり、生々しく存在をはじめものになつてしまふ。その存在感に耐えられるだろうか？ すなわち、わたしはわたしの存在、わたしの物質的な存在というものに、ほんとうに耐えられるだろうか？

これは難しい問題である。こうしたことは、ある

種の人間にとってはほとんど生涯をかけた課題なのに違くない。ヨーガをはじめたとき気がついたのは、肉体というひとつの叡知の存在だった。わたしは体がそれ自体で宇宙的な知恵を持つものであることを、自分がそれを不当に扱ってきたことを知った。体の叡知に耳を傾け、その声を聞く試みは、わたしにとって生涯続く課題になるだろう。その試みの延長に、一冊の本として具現化されたわたしの作品と、わたし自身というものの関係があるのに違くない。それらが互いにどれほど分かちがたく、また同時にどれほど他人であるかということは、いまは置いておくにしても、そこにわたしという存在の不条理や矛盾や神秘がみんなつまっていることは間違いない。

存在は変だ。この地上ではすべてのものがへんてこな、奇妙な、およそ洗練や合理性などとは無縁のもののように存在している。乱雑さは日増しに増してゆき、エントロピーは無限に増大しつづける。そしてそこに奇妙な秩序が現れる。わたしが物理学を理解できるような頭を持ちあわせていたら、きっとこの秩序について、なにかとても気の利いたことを云えたような気がする。でもわたしは悲しいかな、まとまりのない混乱した頭をもつ人種の中でも最もとっ散らかった人間で、相変わらず自分がどこを向いているのかも定かでないし、右も左も混同しがちである。

たぶん、存在そのものが変だなどは、こういう

人間の抱く感想なのだろう。理路整然とした頭をもった人には、万物は理路整然と立ち現れるに違いない。そしてそこではすべてが美しいハーモニーを奏でているのに違くない。頭の混乱した人間は、その美しい庭の中に土足で踏みこみ、あらゆるものをめちゃくちゃにして、ますます自分を混乱させながら走り去ってゆくのだろう。そして人々の響きを買うのだが、自分でもどうにもしようがないのである。

昔は、自分を鳥か天使の一派に属するものと思っていた。いまだってそう思いがちなのがあるし、わが魂が鳥か天使の仲間であることは疑いようがないのだが、しかしわたしは自分のすべてが死からやってきたことを、いまはいやというほど知っている。自分がそこから生まれてそこに還るのだということ、わたしの全身がそれを懐かしみ、同時にそれを恐れていることを知っている。

生もなく死もないとは、わたしは云わない。それは人の表と裏だ。表にいるとき、わたしたちは表のやり方で、あの冷たい暖かさに満ちた彼岸をなつかしみながら行かねばならない。そこにはあらゆる悪があり、善があり、不完全さと苦しみと痛みとがある。指先でそのひとつひとつをなぞりながら、わたしたちは行く。やがて帰るべき場所へたどり着いたとき、そのすべてがわたしたちを抱きにやってくるだろう。

そんなわけで、わたしはもう少しこの世のやり方を模索することにする。というより、この世のあり方に妥協することにする。個人的なことを云えば、相変わらずデータのほうが楽だし、デジタルのほうが好きだ。わたしは抽象的なものが好きだ。重さを持たないものが好きだ。でもそれと同じくらい、漬物石やウシガエルやばかみために育ちすぎたキュウリが好きだ。そのあいだで身動きがとれなくなっているくらいが、わたしのようなのにはちょうどいいのかもしれない。

人が現物の本のほうがいいというなら、そうしてみよう。本にしたからといってわたしの小説の価値が上がるわけでも下がるわけでもないのだが、本のほうが存在感があり、無視できないというのなら、あらゆる手間と不便とを承知で本を作ってもいい。その手間と不便とのなかに、もしかしたら、わたしの知らない別の叡智が眠っているかもしれない。

### 後記に代えて

十二月に入ったとたん、雪が降ってきた。初雪はたいいてい頼りなく、はかなく消えるものだが、今年の初雪はそんなかわいいものでなく、もうすでに一

月のように降りつもっている。今日は十二月二日だが、このひと晩で二十センチくらい降ったという。明け方には除雪車があたりを走りまわっている音が聞こえていた。

さつき、今年はじめての雪に挨拶するために、外に出てそこらじゅうの雪を踏んで歩いたが、わたしは雪にまた会えたことを喜んだし、雪のほうでもまたわたしに踏まれるのを喜んだ。雪は以前と変わらずわたしの友だちであり一番の理解者だ。こいつがないと、わたしの魂はやっぱり半分死んだようだ。

しかしこの冬は、どうも喜んでばかりもいられないらしい。この冬の暖房費がいつたいいくらになるか、想像もつかない。父の話では、灯油代はすでに昨年度の倍になっているらしい。電気もガスも水道も値上がりしているとなると、いったいどう工夫したものだろうと思う。

生体反応などの研究によると、人間は本来あまり寒いところに住むようにはできていないようだ。わたしたちの故郷はやはりアフリカの、日差しのたっぷり降りそそぐ大地の上なのだろう。それがこんなドカ雪の降る地域にまで生息し、ほとんど北極の近くにまで広がっているというのは、やはり燃料があつて暖まれるからこそだ。人を人にしたものは火ではないか。冬になると毎年そう思わずにいられない。火と太陽とをまつることは、祭りのなかでももっとも原始的で尊い祭りではないか。

人を人らしくするのはぬくみと明かりである……これは父の名言である。寒さは人の性根を悪くし、人を卑屈にする。それはほんとうかもしれない。だから人は競いあい奪いあつても光と熱とを求めてきたのかもしれない。そしていまだつて、求めているものは結局同じであるのかもしれないのだ。

この冬はいつたいどうなることだろう。なんだか怖いようだけれども、すべての人が、あまりひどく苦しまずにすむことを願うしかない。

二〇二二年十二月二日

水澤雪下

<https://mjibms.com/>



Arthur Dove : Foghorns